

2009年 3/24(水) in 市立総合生涯学習センター (第1研修室)



落語は「笑い」であることに對し、講談は「ストーリーテラー」だと。歴史を叙情的に語るものなのではないでしょうか。

様々な著者によってクローズアップされる人物や時事が異なる歴史物語りや、同じ被写体を様々なカメラマンによって違う写真が生まれるのと同じように、アングルを変えると見え方が変わってくるものだから。

女性の講談師という希少な存在の小二三さんは「講談は、お客様と同じ空間を共有すること、コミュニケーションがあることが魅力です。」とのこと。難しく思われがちな講談という芸、きっかけがあれば、是非体験いただき、絶滅の危機を克服しようではないですか。

「講談を学ぶ」というテーマで、講師としてお招きしたのは女流講談師の旭堂小二三さんと、毎日放送の報道部の大谷邦郎さん。大谷さんは自称「駆け出し講談作家」という肩書きを持って、講談の普及活動を行ってられます。何故その道を目指しているかと言うと、「このままだと必ずと言っていいほど、講談、特に関西の講談と言うのは絶滅してしまっているからなんです。例えば、地球の温暖化により遠くまで姿を消してしまうであろうと言われるホッキョクグマは、さて何頭いるかご存じでしょうか?2万頭です。では関西の講談師の数をご存じでしょうか?僅か15人にも満たないのであります。ホッキョクグマと比べられても講談師の方々は困ってしまうでしょうが、講談の現状はまさに北極より寒い状態、絶滅不可避な古典芸能と言えそうです。」と、軽快な講談の紹介からはじまって…。

旭堂小二三さんの講談、まずは「牛盗人」。歴史的背景に加えて、商人、役人などのやりとりを一人で講じる。はじめて聴く人は、よく聴いていないと分からない節も多いのですが、ここは勉強会ということで、大谷さんの解説が入れば、「なるほど…」とうなずける。また、英語バージョンも披露して下さったのですが、こちらはまた、違った感覚が味わえます

▲会場はリラックスした雰囲気、和やかな笑いに包まれていました。

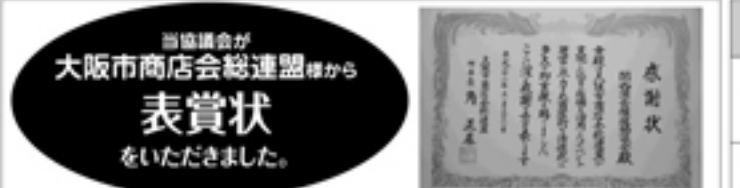
笑顔で世直し! けんちゃん先生の「経営」漫才

- けんちゃん先生: さあ、虎ちゃん、これからけんちゃん先生と「経営」漫才をはじめようか。(以下略)
虎ちゃん(以下略)
Q よろしくお話しします。ところで、けんちゃん先生、「経営」言うのは難しそう、そやけど、けんちゃん先生やから面白いかなあ。
A 虎ちゃん、まかしといて、「経営」を勉強したら元気が3倍になるよ。
Q そやったら早よう教えて下さい。
A わかった。それでは「経営」とは何かということから始めようか。
Q 「経営」というのはよく聞く言葉やけど。
A そう、まず「経営」の「経」は、お経の「経」なんや。
Q えー、お坊さんが拝んでるお経のこと!
A そのとおり! 「経」という言葉の意味は、人はみんなお互いに助け合って生きていくということ、したがって、みんなに役に立つように物をつくったりサービスをするということなんや、つまり人に喜ばれるということなんや。
Q なるほど、初めて聞いたわ。それでは「営」とはどういうこと?
A 経営の「営」の意味は、力を尽くして励むこと、そして自分自身が成長していくことなんや、つまり、自分も喜ぶということなんや。
Q なるほど、そうしたら「経営」というのは、「人のお役に立つようにがんばって、自分も成長する」ということなんだ。
A そのとおり、虎ちゃん、聞いてね、「経営」とは「喜ばれて喜ぶ」ということなんや。
Q 人が喜んでくれるのを見たらこちらも嬉しいなる、元気になる、これは虎ちゃんだけでなく誰でも経験してることやなあ。
A そう、逆に言えば、笑顔が落ち込んでいく人は「経営」を行っているということなんや。このことは個人だけでなく、会社・家庭・学校、その他、人間のあらゆる営みに当てはまることや。

その1.経営の原点=「お母ちゃんは名経営者」の巻 山本 憲司(大阪成蹊大学現代経営情報学部教授)

- Q なるほど、「経営」がとても大切なこと何となく分かったわ。
A そうしたら、身近な「家庭」を例にもう少し話をしようか。それは「お母さんは経営者!」ということや、虎ちゃんの家の「晩ご飯」のことも考えてみないか。
Q そやなー、お母さん、今晩はおいしいカレーライスを作るよ、と書ってた。
A お母さんは、いつもおいしい食事をつくるために知恵と工夫を凝らしているよ。
Q そうか、けんちゃん先生が言おうとされてること分かった! つまり、お母さんは家族のみんなに喜ばれるようにがんばって料理をつくらせて、皆がおいしいおいしいと喜ぶ様子を見て自分も喜ぶ、つまり、「お母さんは経営者!」ということやねえ。
A そのとおり、それだけやないよ、お母さんは、おいしい食事をつくるための「方法は無限にある」ということを分かっていて、いつも進歩向上しているよ。
Q 人のお役に立つように一生懸命がんばって、自分もどんどん成長する、つまり、「お母さんは名経営者!」や。
A そのとおり、虎ちゃん、頭ええな、「経営」がかなり分かったな。
Q どうもありがとう、嬉しいな、お母さん、いつも料理を作るとき「下ごしらえ」を丁寧に丁寧にやってるの、虎ちゃん、知ってるよ。
A よく見ているね、虎ちゃん、下ごしらえは「愛情」の現われや、「経営」で一番大事なことは「愛情」や、いつもスーパーで「出来上がったもの」を買って皿の上に並べるだけ、というお母さんも多いらしいけど。
Q 虎ちゃんの友達で食事作らないお母さんもいるよ。
A いろいろと事情があるんだろうな。
Q 「経営」大事やな、もっと「経営」の勉強したくなってきた。「好きやねん勉強」や。

けんちゃん先生:山本憲司 大阪市立大学商学部、松下電器産業(現、パナソニック)34年勤務、京都産業大学経営学部を経て、現在大阪成蹊大学現代経営情報学部教授。山本ゼミの中に「千房・勝手に応援部」があって、千房の経営を現場主義で本気で勉強している。
虎ちゃん:けんちゃん先生の門下生 大阪を愛し、熱烈な阪神タイガースファン。



編集後記
今回は「てんのじ村」をレポートすることで、スタッフ女性3人、仕事帰りの夕刻に待ち合わせをし、あてもなくその村のあったらどう場所をさまようことに。新世界と天王寺という賑やかな町の狭間に、その昔、多くの旅人さんが通ったであろうと思われる場所に出くわすと、旅人さんたちがキャッチボールをしたらしいと噂の噂の噂のした風景。昔の村の時と比べると全然違うものの、まだ懐かしいような雰囲気を醸し出していた。利便性を追うがために無くしつつある古き時代、都市だけでなく、文化や教育、産業、ライフスタイル等等、見つめなおすきっかけになりました。また、ひとりで行動して見つからないものも、二人、三人の知恵が加われば、まったく想像しなかった発見が生まれたり…。便利になって情報もすぐに入手できる時代ですが、足を使い、自分の目で見て、感じて、触れるということ、どんな便利なツールにも勝る、豊かな感覚として見るものもです。(ではまた次号で…)

イベント報告&案内
■6/19(金) 総会(18:30~) 於) スイスホテル南海大阪
■記念講演: 難波 利三氏
■8/22(土) ワッハ祭り 於) ワッハホール

NPO法人関西演芸推進協議会「会員募集中!!!」
NPO法人関西演芸推進協議会<事務局>
大阪市浪速区難波中1-10-4 千房株式会社内
TEL.06-6633-1430 FAX.06-6633-1435 mail: info@walive.org
協議会のウェブサイトもご覧ください! http://www.walive.org



INFOMATION

新緑が美しく、爽やかな季節になりました。いつも当協議会へのご理解、ご協力を賜りお礼申し上げます。イベントも多く開催が予定されている時期、会員の皆様もお出かけされることが多いのではないのでしょうか。特に、お天気の良い日は、自然や文化に触れてみたくなったり、ショッピングを楽しんだり、親しい方との会食などのご予定をたてられたりと皆様お忙しいことと思いますが、当協議会でも5月、6月とイベントが予定されています。この心地良い気候を背景に企画されている「関西の演芸」にも親しみ触れてくださいませ。

この人に聞く シンデレラ・エクスプレス 渡辺 裕薫さん(松竹芸能所属)
協議会の会員の中にもファンが多く、昨年は出前寄席でも大変お世話になりました。シンプル・渡辺さんにタイミングよく、「第44回上方漫才大賞 奨励賞受賞」のすぐ後にインタビューすることができました。
※上方漫才の発展と育成のために66年から続いている最も伝統ある漫才賞
◆シンプル・渡辺さん

Q 最近はテレビでショートネタはよく観るのですが、長尺の漫才などは聞く機会が減ってきたように思います。今の傾向をどのように思われますか。

A 「飽きられる周期が年々早くなっていますね。ギャグなどのインパクト芸は飽きられやすい。ただ持ちネタはないとアカンと思うんです。例えば、「横山たかし・ひろし」さんのように、ネタに組み込まれたところまで高められれば、はやりすたりとも関係なくなりますが。昔、取材をしたお菓子屋の社長さんがおいしいものを作らないといけないうと、とことん美味しいものは飽きられる。だから日々食べても飽きないものにすることを信条にしているというのです。自分たちはもちろんテレビにも出たいが、舞台も大切にしたい。最近、落語の世界を見るとテレビで顔が売れている人たちがみな寄席を大切にしている。今の漫才の傾向を見ていると、逆に漫才が再評価されるいい「とき」を迎えているのではないかと思います。自分たちは芸をやる芸人でありたいし、何より舞台を大切にしています。」

Q 今年で21年目を迎えるそうですね。何か転機のようなものはありましたか。
A 「20代でデビューし、すぐにNHK上方漫才コンテストで優秀敢闘賞を受賞したりして順調でした。ところが、年を重ねるにつれ自分たちは年をとるのに、観客は入れ替わるから20代のままなんですね。(年齢的なギャップもあったのか)それまでのネタが受けなくなった。その後10年間はしんどかったです。そんな時期を経て6年前に、相方(松井さん)がテレビ「電波少年」に出演したんです。それも実はそんなに話題にならなくて、ブランクの後、久しぶりに二人で漫才をしたんです。最初は正直いって「こんなオッサン臭いネタ」「ゆるい」と感じました。(先日の受賞のときの漫才はこのときの台本だそうです)」

Q シンプルさんの台本は自分たちで書かれているのですか。
A 「漫才作家のブレンがいます。自分達が欲しいのは「設定」とか最初の「発想」なんです。おもしろいオチとかではなくて、何と何が対話をしていく設定とか。例えば、「コンビ名」を変える設定であれば、着地点だけ決めておいて、後は舞台上で、アドリブで作り上げていくところはあります。」

Q 年々寄席のできる「場」が減りつつありますが。
A 「自分たちは基本的には地方のホールや会館など、どこでもOKなのです。ただ、定席はやはり必要だと思います。寄席のよさは、何回でも失敗できるし、決して手を抜いているわけではないのですが、すべてでもOKなところ。だからどんどん改良できるし、芸人にも力がついていきます。実際、寄席にくるお客さんはそういうところも楽しんでくれていると思います。」

CONTENTS
☆この人に聞く(シンプル・渡辺さん) ..... 1頁
☆レポート(てんのじ村の足踏をたどって) ..... 2-3頁
☆イベントレポート(講談をまなぶ) ..... 4頁
☆協議会入会のご案内 他

Q 渡辺さんが漫才の世界で次代に継承していききたいものは何ですか。

A 「漫才は落語のように、伝承芸ではないんです。だから「あいさつ」とか「しきたり」みたいなものを伝えていければ、しきたりというのは、劇場とは芸人にとってどういう存在なのかということ、「芸を磨く場所だよ」ということを伝えたいのです。こういうことは口で伝えるのではなく、自分達の姿(背中)をみて理解してもらいたい。」

Q 昨年は出前寄席で大変お世話になりました。渡辺さんには演者さんの選定などでもお世話になりました。

A 「以前から落語には地域寄席があるのに、漫才にはそういうものがないのは何故なんだろうとずっと思っていました。定期的に、気軽に漫才を見ていただける機会があったらいいのにと思っていた矢先の出前寄席でした。継続的にこういう形が定着してきたときに、芸人もお笑いも幸せになれると思います。(過酷な条件の出前寄席の会場もありましたが)第一に「場」があることがベストです。空き店舗であれば、なおベストですが。」

Q 最後に渡辺さんの漫才へのこだわりのようなものをお伺いできればと思います。

A 「あえていうなら「役割を演じる」こと。舞台上では、勝つ役、負ける役という役割がありますが、若いときには、こてんぱんにやられる、観てる側がいたそうと思えるまで負ける役を演じるのは難しいものですが、年齢がいくとそうすることができるようになります。これから年をとるにつれてできることが増えてくると思うと楽しみです。もっと激しく演じて「かわいくみえたら」いいなと思います。最終的には自分の性格と舞台上が一致して自然と何かになっていく面白さ。」



こちらの質問に対して、ほとんどムダなく瞬時に話がまとまって返ってくるのです。さすが、やはりしゃべりのプロは違いますね。最後に、待つことが仕事だとおっしゃっていました。だから、15分の舞台、ナマ芸は、舞台にわたしたちの足を運ばせるのですね。(聞き手 事務局 石井サト子)



まだ少し肌寒い4月某日。上方演芸発祥の地といわれる「てんのじ村」を見てみたいとの思いから、協議会スタッフ3人で、てんのじ村巡りに繰り出しました。アポ無しプラン無しという、軽い気持ちで始まった村巡りは、驚きと発見の連続となりました。

# 上方演芸発祥の地「てんのじ村」

てんのじ村は、現在の西成区山王1、2丁目界隈にあたります。地下鉄「動物園前」駅に集合し、まず向かったのは、もちろん「てんのじ村記念碑」。ちょうど阪神高速松原線の阿倍野入口近くにあります。記念碑の文字は、漫才作家の秋田實氏のもの。大きくて立派なのに、ひっそりとしています。保存の為とはいえ、頑丈な柵で囲まれているのも、少し寂しく感じました。

続いて、町の中を歩いてみることに。レトロで懐かしい佇まいの家が立ち並び、まるで昭和にタイムトリップしたようです。すれちがうおばちゃんに話しかけると「お店をしていた頃は、毎日芸人さんが来てくれたわ」と、気さくに答えてくれました。ふらふら散策を続けていくと、細い道から路地（大阪では「ろおじ」といいます）が何本も伸びていて、路地を挟んで向かい合うように長屋が並んでいる風景が、あちこちに見られます。ちょうど路地から出てきた女性に聞くと、「昔は芸人さんが住んでいたけれど、今はいないよ」とのこと。少しでもいい、昔のことが聞けたら…。



▲まずは地図を確認。どうやらこの界隈らしい…



▲芸人さんは住んでいないが、なんとなく雰囲気のある町並み



▲舞台での美しい浪花歌笑さんの写真が飾られていました。

てんのじ村で50年、芸能生活80年の浪花歌笑さんをたずねて…



▲芸能生活80年を迎えられる浪花歌笑さん

そう思っていた矢先、てんのじ村の生き字引といわれている方がいると聞き、向かったのが「ナニワ企画」。その方は、浪花歌笑（なにわかしょう）さん。満4歳で初舞台、以降、浪曲師として活躍しながら「浪曲ミュージカル」を発売するなど、独自の芸を生み、歩いてこられた方です。もうすぐ芸能生活80周年を迎える歌笑さんに、てんのじ村の話伺いました。「50年前には、約300人の芸人さんがてんのじ村に住んでいました。家から一歩出たら、芸人だらけ（笑）。いちばん多かったのは漫才師。奇術師や曲芸師、落語家もいましたよ。ミヤコ蝶々や人生幸朗も住んでいたけれど、皆、有名になったら出て行きました。ここには、大きな芸能会社に所属していない、フリーの芸人がたくさんいて、縛られず、芸に磨きをかけていました。そういう芸人の為、軒先所も6〜7箇所ありました。今はウチ（ナニワ企画）だけになり、芸人もほとんど住んでいません。ここに芸人の村が誕生したのは大正時代。現在の天王寺公園一帯で博覧会が開催された折、舞楽師をはじめ、芸人が多く住んでいた天王寺の伶人町が立ち退くことになり、移転してきたのが発端と聞いています。その頃は住吉区天王寺村といいました。まだまだ田舎でしたが、劇場がたくさんあった新世界に近く、ミナミの劇場にも通いやすい。そんな理由で、どんどん芸人が増えていったのです。

## 「てんのじ村」の石碑

父・漫才作家、秋田實さんの思い出を話していただきました。

「てんのじ村」の文字は、父が書く約束になっていたようです。でもその時期になったとき、あいにく大阪市大病院に入院中だったので、病室で愛用の原稿用紙のマス目に「てんのじ村」と書き、碑はその文字を拡大したそうです。そういう話を母から聞いていたので、数年前に初めて碑の文字を見たときは、とても懐かしい気がしました。 藤田 富美恵

しかし、高速道路の建設や、町の再開発で、一気に人が減っていき、町も様変わりしてしまいました。少し前までは、石畳の道もありましたが、歩きにくいという理由で、アスファルトになりましたし、今は当時の名残など、何もありません。」  
これからも、この地に住みながら、人情の機微がある浪曲を、もっと若い人に知ってもらえるよう活動を続けていきたいと語る歌笑さん。突撃アポ無し取材であったにもかかわらず、快くインタビューに応じてくださり、華やかなりし頃の、てんのじ村の様子から歴史まで、たっぷりお話ししてくださいました。

「ナニワ企画」を出ると、どっぷり日は暮れていました。町のあちこちからは、夕飯の香りが漂ってきます。てんのじ村の面影は残っていませんでしたが、ディープで人情味に溢れ、温かなところは、きっと昔のままでしょう。余韻を楽しみつつ、新世界名物の串カツと、どて焼きで軽く一杯。お店を出て夜空を見上げると、通天閣がピカピカ輝いていました。てんのじ村が最も賑わっていた頃と、変わらない輝きで…。



▲新世界名物「どて焼き」でしめくくり…



▲突然の訪問にも関わらず当時のことを親切にお話ししてくださいました。

新刊のご案内

5/4  
発売

「からほり亭で漫才！」

藤田富美恵 著  
(文研出版)